

## 「市民の歴史」を編む

シチズンシップ共育企画  
代表 川中大輔

「今日はなんの日ですか？」と尋ねられたら、みなさんはどう答えられますか。日本記念日協会のウェブサイトを見ると、その日が「なんの日」なのかを知ることができます。しかし、「市民にとって意味のある日」を私たちはどれほど伝えることができるでしょうか。

小田実・鶴見俊輔・吉川勇一が編者となってまとめた本に『市民の暦』（朝日新聞社、1973年）があります。「国家のがわから押しつけられる暦ではなく、市民が自分の手でつくりだしてゆく、市民の暦を編んでみよう」（前掲書「まえがき」）との思いから、この本には一年366日、全ての日に「市民にとって意味のある日」が2～5項目ずつ、記述されています。例えば、11月28日は水俣病患者ら一株株主がチッソ株主総会に出席した日、6月10日は東大セツルメント・ハウスが本所に開設された日、3月5日は無着生恭編『山びこ学校』が出版された日

であることが分かります。

「市民にとって意味のある日」。それは上記のような社会問題に挑んだ市民の歴史だけではありません。問題ある社会システムに弄ばれた市民の歴史もあり、また、同時にそうした社会システムに加担した市民の歴史も含まれるものです。こうした複合的な「市民の歴史」を学ぶことは、過去から現在への教訓を得たり、過去からつながっている現在の諸事象への理解を確かなものにしたります。

今夏、私は京都の在日コリアン集住地域でフィールドワークを行いました。その中で在日コリアンを排除してきた日本社会の歴史と、その排除に抗してきた闘いの歴史に耳を傾けました。当事者の語りから自らがいかに無知であり、その無知故に様々な情報を十分に吟味できていなかったことを反省させられました。この経験は「市民の歴史」の必要性を強く痛感させられ

るものでした。

ヴァイツゼッカーは『荒れ野の40年』（岩波書店、1986年）の中で、旧約聖書の記事を参照しながら、私たちが様々な経験を心に刻み続けられる一つの区切り目を40年と述べています。今から40年前の日本社会は、新しい社会運動の草創期。折しも『市民の暦』が発刊された年です。そうした運動の歴史から私たちは何を学び、心に刻み続けていくことが求められているでしょうか。

区切り目の一つを迎えているとも言える今、私たちには過去に学ぶ機会を設け、また各地で「市民の歴史」を記録し、繋ぎ合わせ、編み続けていくことが求められています。そのようにして、シチズンシップ教育の歴史資産を積み重ねていきたいものです。

川中大輔 (kwnk@nifty.com)